

ダンジョンで友人のお守をするのは間違いだろうか？

翠星紗

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

出逢いを求めオラリオにやってきたベル・クラネル。彼が初めてオラリオで知り合ったのは極東出身のミツキだった。

いい加減な友や仲間と共にダンジョンで出会いを求める。

## 目次

因果応報	1
勧誘	5
初恋ですね	11
スキル発現	15
少女確保!!	20
冒険者でも一軒家は夢ではない	24
良いだろう……結ぶぞ！ その契約!!	28
そう。社会的に	33
青春は青い春と書きます。	40
倒れたって恥ずかしくない もう一度立ち上がれば	48
ガネーシャにオイルぬってポーズ取らせたらボディビルダーみたいになると感じた今日この頃	53
1000本ノック。声出していこうぜえ！	60
中途半端な知識でネタを作ると、話が見えなくなるのは当たり前だ。	64
俺の自称妹が自己中心的でドが付くほどの真面目な訳がない。	67
名探偵にかかればこんな推理造作もない！	71
颯爽と登場、そして退場!!	76

## 因果応報

広大な地下迷宮、通称ダンジョンを中心に栄える迷宮都市オラリオ。その広大な地下迷宮で二人の少年がモンスターに襲われていた。ミノタウロス。上階層にはいないはずのモンスターが何故か二人の冒険者を襲っていた。

「ベルちんベルちん！ この状況やばくないかい!？」

「分かっているなら助けてくださいよ!？ なんのためにミツキさんがいるんですか!!」

「お前さんの鍛錬のために態々来てやったんじゃないですか？ それなのにベルちんは全てこの状況を僕のせいにするんですか?? ああ、やる気なくした。めっちゃやる気なくした!!」

ヴオオオオオオオオツ!!

「今は喧嘩してる場合じゃねえーーツ!!」

白髪に赤眼の少年のベル・クラネル、黒の長い髪を後ろで結って和装なミツキ。二人ともヘスティア・ファミリアである。

そろそろ体力の限界が近づいてきた二人はスピードが落ちてくる。しかし、そこでミノタウロスの持つ棍棒が唸った。

近づいてきた二人の背後へ棍棒を振り下ろす。それをギリギリで躲してまた少しスピードが上がる。

「み、ミツキさん。もう……」

「情けねえなベルちん。それじゃ…俺の国の言葉を一つ教えてやるよ」

「な、なんです…か?」

“獅子は我が子を千尋の谷に落とす”

「ど、どういう意味です?」

「それはな……」

身をもってしれいい!!」

「あが!」

ミツキはベルの足を蹴り飛ばした。バランスの崩したベルはその場で倒れ込み、目の前を“あばよとつつあぁああん!!”と言いながら走り抜けていくミツキを見つめた。

彼の言った言葉は分からない。ただいえるのは…

グルルル……

「……」

おとりにされたことだ。

ベルちんの修行のため態と危険な場面へ放り込んだミツキは良心が痛んでいた。グスグスと鼻を鳴らし、目からは涙が出て“これも修行のため、これも修行のため”と心を鬼に……

「これでロリ巨乳は俺のもんだあ!!」

稀に見る最低な男だった。

ベルの戦死を悔やみながらミツキはダンジョンの角を曲がる。するとそこにはあるはずのない壁があり、ミツキは急停止することが出来ず壁にぶつかった。



広大な大迷宮にミノタウロスとバカの叫び声が反響した。

## 勧誘

グオオオオオオオオオオツ!!

「あぶねっての!!」

ミノタウロス二匹の攻撃を躲し距離をとるミツキ。早く戻らないとベルちんの命がマジで危ないだろう。なんである時、二手に分かれる作戦を取ったのかと自分自身に苛立ちを覚えていた。(自分のやったことを忘れてる奴

流星にこれ以上時間をかける訳にはいかないと、ミツキは腰にある刀——袖白雪——に手をかける。ミノタウロスの動きを静かに見つめ構えた。

動きの止まったミツキにミノタウロスは咆哮を上げながら彼を見定めて棍棒を振り下ろす。しかし、振り下ろした瞬間、ミツキはそこにはない。

それどころか棍棒を持つ腕を振り下ろしたはずなのに見えない。肩から先の感覚がなくなっていた。

ミツキによってミノタウロス二体の腕は斬り落とされていた。それも自らの腕が斬られたと判断させるときなど無い。しかし、気づいた時には……

「初の舞・月白——」

ミノタウロスを中心にした白い円が足元に浮かび上がり、地面から天井に向けて氷の柱がミノタウロスを呑み込んで行った。

二体の死を確認したミツキは刀を仕舞い。氷を見つめる。

「マンモスもびっくりだなこりゃ。さて、と……ベルちんを助けにつて!?!」

「おらあ!!」



路を引き返そうとした瞬間。背後から叫び声と共に足が飛んできていた。

慌てて避けるミツキは目の前を白い影が通りすぎ、二つの氷柱を破壊する。あ、ドロップアイテム見つけ。

いそいそとドロップアイテムを拾っていると、蹴りの主がまた叫び弾けた。

「よけんじゃねえよ!!」

「避けるは狼人間!! 貧乳神の所に居てると考えが狭くてたいへんだあーなツ!!」

狼人間。ロキ・ファミリア所属のベート・ローガ。

なにかあると俺に戦闘を吹っかけてくる狂人……いや、狂犬だなこりや。

「俺はこの後、やることがあるんだよ! ワンちゃんはそこどけ!!」

「うっせ!! いつも勝負から逃げやがって! さっさと勝負しろや!!」

「なにこの理不尽な子!! 飼い主に再教育してもらってきなさい!!」

「んだと、男女が」

「?!?!?!?!」

「あああ?!?!?!? なんだとゴラア?!?!? 誰に口きいてんのか分かってんのか!! てめえ~~え~~みてえな戦闘狂なんざ

相手にしてる時間がねえつつつてんだろ!! そんなにここで殺されてえのかワレ!!」

「行くぞゴラア!!」

「上當じやワレエ!!」

「やめんか、バカモン共があツ!!」

今にも取っ組み合いのケンカになりかけた瞬間、一人のドワーフがあほ二人の頭を殴り鎮めた。

ミツキは地面に埋まった頭を上げて殴った奴を見ると、そこにはロキ・ファミリアのガレスのじっちゃん。いつの間にもやら他のロキ・ファミリアの皆様も来ていたようで、団長であるフィンクンの姿があった。

「いつてえ……ガレスのじっちゃんもつと優しくしてくれよお」

「たわけ、こんなところでケンカしとるお主らが悪い」

「そういうなら、この狼人間に首輪つけといてくれよ!!」

「んがあ!?!」

まだ埋まっていた狼人間の後頭部を殴ってさらに頭を埋めてやる。なんか変な声が聞こえたが気にしない。

というより、周りのみんなが呆れてるんだが……まあ、今はいいや。

「とりあえず。こいつ頼むわ 「ゴオ!?!」 今からはぐれた仲間を助けに行かなあかんのでな」

「仲間? キミの所のレベル1の子 「ベギヤ!?!」 だったかな?」

「そうそう。今頃、ミノタウルスにやられてないか不安で不安で……」

余りに心配で辺りをウロウロしていると時々カエルを踏んでいるのかやな感触と鳴き声が聞こえる。

そんな心配する俺にフィンくんは呆れてため息を漏らしながら、再度口を開いた。

「それなら、アイズが助けた筈だ」

「そうなのか、お姫?」

「うん。ミノタウロスに襲われてたところを……すぐにどっか行っちゃったけど」

「ああ……まあ、ミノタウロスなんて初めて見るだろうからな。お姫、ありがとな」

なんか、お姫の様子が暗いような気がするが……まあ、腹減ってるだろ。

それじゃ、ベルちん俺より先にダンジョン出ちまったのか？ 薄情者が……あとで、こらしめてやる。

なら俺もここに居る必要はないな……。

「そんじゃ、先にダンジョン出る——」  
「ちよつと待ってくれミツキ」

足早に出て行こうとしたが、フィンくん呼び止められてしまった。

正直、彼が何を言いたいのかわかってる。どうせ——

「やっぱり僕たちの所に来る気はないかい？」

「相変わらずしつこいねえフィンくんも……。俺はあのロリきよ——  
——じゃなくて、ヘスティアが好きなんだから」

「ほとんど出てるわよ」

「なんなら、ティオネちゃんとりーさんが僕のお嫁さんになってくれるなら!!」

「断る」

「誰があんたなんかの嫁になるってんのよ!!」

「じゃ、一生無理だね」

ちやちやを入れてきたアマゾネスの姉であるティオネと今まで黙ってたエルフのリヴェリアに近づいて両手をワキヤワキヤさせながら近づく。

りーさんは呆れ、ティオネちゃんに至っては今にも殺しそうな殺意を見せながら睨んできた。分かりきっていた模範解答と俺の反応に

フィンくんはヤレヤレと肩を竦めた。

「じゃ、一つ課題を出そう。それがクリア出来たら、俺はフィンくんの言いなりだ」

「その課題ってのはどういったものかな?」

「あんたらん所の主神様いるだろ? その胸部を大きくすることが出来れば絶対入ってやるさ。じゃな!!」

そういつて、ミツキはその場から逃げ出したのであった。

ロキ・ファミリアが本拠点。黄昏の館に帰還するとそこには主神のロキが大手を振って団員の帰りを待ちわびていた。

「おかえりな。みんな無事やったか?」

「ああ……報告に関してはあとでするよ。なあ、ロキ」

「ん? なんや?」

フィンが問いかけてロキがそれを静かに見つめてる。何か言いだすのかと思いきや。

「……ふう。難題だな」

「何がや!?!」

「まあ、無理と分かかっていっとったからの」

「こればかりは私の力も及ばん」

「な、なんやねんお前ら!! あ、アイズたん、フィンたちが虐めてくる!!」

まるで可哀そうな目で見てくる古参の三人にロキはアイズにしがみ付く。

そんなロキを見てアイズは……

「はああああ……」

「あ、アイズたんまで……」

その場で崩れ落ちるロキの姿が夕暮れ時の本拠点前で見られたとか。

## 初恋ですね

ダンジョンを出てギルドのエイナっちの所に行くと、すでにベルちゃんはドロップアイテムを換金に来たとのこと。

しかし、その時の格好は頭からミノタウロスの血を浴びた状態で来ていたらしく。一度、ギルドでシャワーを貸してもらい、エイナっちの説教を受け……

「あん？ お姫のことを聞いてきただと？」

「うん。どうやらベル君に憧れの人ができちゃったみたい」

「ああ……なるほどな。分かりやすく可愛いねえベルちゃん」

「どうやら、ミノタウロスから助けてもらったことが原因か。彼女の姿、美しき、可憐さ、強さに惚れ込んでしまったらしい。」

「まあ、ロキ・ファミリアに要る時点で恋愛はむずいだろうなあ……」

「儚き夢だな。振られたときはエイナっちが慰めてあげてくれよ」

「振られるの前提なんですね」

「まあ、ロキん所だからな……」

「ああ……」

納得してくれたようだ。

「ま、初恋は実らないって言うから仕方ないよベルちゃん。」

「あれ？ ベルちゃんの初恋ってお姫で良いのかな？ここに来る前はどうかだったんだろうか。」

「あの純粹無垢なウサギちゃんだしな……」

「んじゃ、今日は帰りますわ。エイナっち」

「はい。それでは」

小さく手を振り返してくれるエイナっちを後に、ミノタウロスを倒

して手に入れたドロップアイテムのヴァリスを元手に色々食材を  
買いあさった。

ファミリアの本拠点はオラリオの街から少し離れたところにある  
廃れた協会である。ただ、本拠点とギルドの丁度間位の位置にミツキ  
の家がある。

一旦、荷物をすべて家に片付けてから拠点に向かう。協会は天井が  
所々朽ちてなくなっており、隙間風なんて至る所から入り込んでい  
る。協会の奥に部屋があり、そのドアを開けると地下に続く階段が  
見える。

扉を閉めて階段を下りていくと一つの扉。ゆっくりと扉を開け  
……

「よお、ベルちゃん帰ってきてるかブベラ!？」

「ミイツウキイ~~~~!! キミはベル君を置いて一人で逃げたん  
だつてえ!!!」

戸を開けたと同時に主神様のコメントパンチが飛んできた。綺麗  
に顎を狙われたため、軽く目の前に星が回っている。

しかし、ベルちゃん大好き主神様の怒りは治まることはなく、俺の首  
根っこを掴んでは強く揺さぶっている。ただね、ヘステイアちゃん。  
振られるたびに後頭部が扉にゴンゴン当たっていたんですけど？

「君というやつは！ 何のためにベル君のお目付け役になつてると  
思ってるのさ!! それなのに、それなのに何がヴァレン某のことなん  
かああああッ!!」

「神様!! ミツキの頭から血が出てます!! 扉が真っ赤になってます  
よ!?!」

結局、ヘステイアちゃんの怒りが落ち着くまで辺りは血の海になっ  
ていた。軽い殺人現場だよ、これ。

やつと落ち着いて数分後。

「ほんとにベル様には申し訳ないことをしました」

穢れた血が抜けきったミツキは。綺麗なミツキに生まれ変わって  
いた。

正座して指をひぎ元に合わせて深く頭を下げる彼の姿に、二人は冷  
や汗が止まらない。

「神様!! ミツキがおかしくなっちゃったじゃないですか!!」

「い、嫌だなベル君。ミツキは昔からこんなんだったじゃないか!」

「ふふ。お二人とも変なことを言いますね」

「ひい!」

口元を押さえて上品な笑みを見せるミツキに二人は寒気を感じた。  
見た目は中性的であり、どちらかと言えば女性よりなミツキ。

声も男にしては少し高いくらい。和風で長い黒髪のせいで、彼を知  
らない人が見れば半数以上は女性と間違えることだろう。しかし、普  
段の口の悪さと態度でゲス男丸出しのため、折角の綺麗さが失われて  
いる。

しかし、現状二人の目の前にいるミツキはどうだろう。まるで絵に  
かいたようなオカマではないだろうか？

女性らしい仕草に口調、声も高くしているせいか男の娘に見えてし  
まう。

ただ、普段の彼を知ってる二人からしたら気色悪いだけである。

「やつぱり無理でした!! ミツキごめんよ、さつきはやり過ぎたから  
戻ってきてくれえ!!」

「まあ、何を言ってるんですか? 私はいつも通りですよ、ロリ巨乳  
様」

「うええええんツ!!」



「……………ん？なんて言ったんだい？」

「先ほどなんて、私の目の前でおっぱいさんがサンバを踊っているよ  
うでしたので、まさに眼福と言わざる負えないです」

「君は何処まで行っても相変わらずだねッ!!」

「デベラッ!?!」

「はあ…どこまで言ってもミツキだよ」

　　またも渾身の一撃をくらったミツキは平手の衝撃で壁と顔面キス  
を行い。そこで再起不能になって動かなくなってしまった。

　　翌日の朝まで目を覚まさなかったため、彼が持ってきた食材は二人  
が仲良く食べきったとのことでした。

## スキル発現

いつの間にか拠点で寝ていたらしい。しかも扉の近くの床で死んだように眠っていたらしく、そんなに疲れ切っていたようだ。

けど、昨日へスティアちゃんに殴られたような気がするんだが……

「なあ、へスティアちゃん。昨日、俺を殴ったりした？」

「な、なんで僕がミツキを殴ったりするんだい!？」

「だよなあ……で、なんで俺の周りは血だらけなんだ？」

「そ、それは……そお!! ミツキが来た途端に気絶するように眠った際に頭をぶつけたんだ! その時に頭をぶつけて、血が出ちゃったんだよ」

「そっか……うん」

ピチャ……

「……」

ピチャピチャ……

「……」 ムズムズ

ピチャピチャピチャピチャピチャピチャピチャピチャピチャピチャピチャピチャピチャピチャピチャピチャピチャピチャピチャツ!!

「ぎゃーっ!! 何遊んでるんだよ!!」

「??」

「純粹すぎる眼差し!? 何が悪いのみたいな表情を見せないでくれよ!」

「……フン」

バシヤバシヤバシヤバシヤバシヤバシヤバシヤバシヤバシヤバシヤバシヤバシヤバシヤバシヤバシヤバシヤバシヤバシヤツ♪

「だからああああああ!!」

「……♪」

子供心が少し戻りました♪

数分、水? 遊びを行った後はしつかりと片づけを行い。少し遅めの朝食をとることにした。

ちよつとふざけすぎたせいか、ヘステイアちゃんはご機嫌ななめの様だ。全く、こんな時はベルちんをヘステイアちゃんに投げ込めば……

「そういえば、ベルちんはどこ行つたのさ?」

「ベル君なら朝早くにダンジョンに言つちやたよ!!」

「なに。まださっきの事怒つてんの?」

「君の事じゃないよ……つたく。ベル君め」

あらら。ベルちんなんかしちやつたのかな?

こんな時はベルちんのことを話してあげた方が良いよね。

「そういえば、ベルちんの事なんだけど」

「ん? ベル君がどうしたんだい」

「あの純粹無垢な少年がついに初恋しちやつたんだよねー。いやあ、今日の夜は赤飯たかなくちやねー」

「……ヴァレン某い……」

「うおい、どつたの!?!」

むきい……ツ!!と、ツインテールを逆立てて怒りを爆発させた。

フライパンの中にある目玉焼きとウインナーをさらに置いて、食パンを取り出し怒り奮闘の主神様の前に、料理を並べる。

「はいはい。怒りはその辺にして料理にしましよ……あ、ミルク出すの忘れてた」

「……ミツキ、まだ戻ってないのかい？」

「はあ？ なんのことだ？」

急にブルブル震えだして変なヘステイアちゃんだな。

それより、ヴァレン某ってお姫のことだよな？ 目の前でモシヤモシヤとリスのように食べるおこちやまを見ると、こちらに気づいたのかクルつと顔を向けてきた。

「モチヤモチヤ……なんだい？」

「……リスじゃなくてハムスターだな」

「なんのことだい？」

「いや、こつちの話だ。それより、今日のベルちゃんは張り切ってるね。ステータスに変化でもあったか？」

「……ベル君には言わないかい？」

「どいう言うことだ？」

急に黙ったかと思いきや。ムムム……と一人で考え出してつまらん。ツインテール両方もってブンブン回しといてやる。

おおお、良く回ることで♪

「うん、ミツキ君には言っておいた方が……って、僕の髪で遊ぶんじゃないよ！」

「ん？ ああ、ごめんごめん。で？」

「ベル君にスキルが発現したんだ」

「へえ。そりやめでたいね……けど、なんでベルちゃんに言っちゃダメなんだ？」

「ベル君のスキルは——」

「リアリスフレーゼ……どういったスキルなんだ？」

「うん。早熟、懸想が続く限り持続する、懸想の丈により能力向上」

「思いが強ければ強いほど早熟、力が増すって？ 何それチート級能力？ まさかと思うけど？」

「僕がやると思うかい？」

「こりゃ、失敬。にしても……それが昨日発現したということは、お姫が関係してるとは思わうな」

「ふん！ 昨日、帰って来てからずっとヴァレン某の話ばつかさ!!」

なるほど、それでヘステイアちゃんの機嫌が悪い訳だ。おそらく、これが発現理由はお姫がベルちんを助けたからだろう。

その可憐な立ち振舞い、強さに心から惚れ込み。彼女に近づこうとする思いで発現したってか……まあ、可愛い少年だこと。

「けど、これベルちんが知ったら調子に乗って無茶するだろうな」

「ベル君に限って調子にはならないよ！ けど……」

冒険者であるならば、強くなればなるほど試してみたくなるもの。さらに奥の階層へ足を運ぶだろうな。

だが、奥の階層はレベルや強さだけで突破できるほど甘くない。ダンジョンに本気で挑むなら、知識、そして仲間が必要になってくる。

座ってるソファアに大きくもたれ掛った。ベルちん大好きヘステイアちゃんからしたら、危なっかしいスキルだよなあ……

「まあ。ベルちゃんのお守は俺がするさ」

「ミツキ……やっぱり君は頼りになるよ!!」

「良いって、良いって、ヘステイアちゃんのおっぱべブシ!!」

感動するヘステイアちゃんに抱き付こうとしたら、主神様のコメントば……あれ？これどつかでくらったような気が――

遠くなる意識の中、ベルちん馬鹿してないと良いけどと思うミツキであった。

## 少女確保!!

今度はソファの上で眠ってしまったようで痛む頭をたたき起こして起き上がると、机の上は綺麗に片付けられており代わりに一枚の紙が置かれていた。

どうやらヘスティアちゃんの置手紙の様で、“今日はバイトがあるから出ていくよ。ミツキ、絶対にベル君にきっきの事言わないでよね！ それと読んだらこの紙は燃やしておいてね。ベル君に見られない様に!!”とのことだ。

読んだら燃やしておく必要はないと思うが。まあ、もって置けばいいだろう。

得にすることもなく拠点を出てフラフラと街を歩く。いつもベルちゃんと一緒に居る訳ではない。露店で暇をつぶしたり、狼人間を蹴り飛ばしたり、じゃが丸くんを露店で買ったたり、お姫にじゃが丸くん取られたり、ロリ巨乳がお姫に威嚇してたり、狼人間を氷漬けにしたりと暇をつぶしながら街路をトボトボ歩く。

「今からダンジョンに行ってもなあ……。何か面白いことないーん？」

目の前から走ってくる小人族パルウムのフードを深く被った女の子、そしてその後ろを刀を担いだ男の冒険者が見えた。周りにいる人たちは関わりを持ちたくないと言われ離れて歩くものや遠巻きから見るもの、家の中に隠れるものがあった。

オラリオに住む一般人は冒険所の物騒ごとなどあまり関わりを持ちたくないだろう。

少女は男に突き飛ばされ前のめりに倒れる。すぐに立ち上がろうとした少女の腕を取り、近くにあった細い路地に男は連れ込んで行った。

「……相変わらず、治安が悪いねオラリオは。やだやだ、おじちゃん怖

い」

この男、まだ19歳です。

やれやれと無駄に大きく肩を竦めて、少女が連れ込まれた細い路地を除く。

男は少女のフードを掴み、今にも殴ろうとしていた。

「このふざけたまねしやがっ 神様直伝コメントパーンチッ!!」

ゴハア!？」

「ッ!!」

男の顎を狙って横から殴り飛ばした。急に現れた不審者に男は反論する間もなく吹き飛ばされ、パルウムの少女は驚いて俺を見ていた。

吹き飛ばした方から少女へ視線を移すとビクツと驚いて顔をそむけた。

赤を基調とした服装なんだが、フード付きで両袖と腹部周辺は破られており、スカートも短くベルトも態と短くしているのか色々目ものやり場に困る服装をしているため、あと数十分眺めていたい。

「ぎげんなよ……てめえなんのつもりだ! そいつの仲間か!」

「お、まだ起きてたのか。元気だねえ……元気すぎるのも良いけど。往来の街中で女の子強姦しちゃダメだろ!!」

「なッ!? ふざけやがって!!」

「ッ!」

男は剣を抜き取りこちらに詰め寄ってくる。少女は驚いて声が出ないようだ。てか、こんな細い路地で剣なんか抜くなよ。

動きが制限されるでしょ?

上段に構えたまま男は斬りかかって来るが、懐に入り込み剣の柄を抑え込み相手の顎に頭突きをする。二度目の顎への攻撃で男は強く



脳が揺さぶられたようで、一步退き剣を持つ手の力が緩んだ。そして、相手の身体に

「アタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ、オワツチャャー！ツ！」

数十発と拳を当て、最後は蹴り飛ばして再度壁へお帰りなさい。今度は完全に意識を飛ばしたようで、力なく地面に崩れ落ちたのだった。

そして、崩れ落ちた男に指をさし

「お前はもう、死んでいる」

「殺したんですか!?!」

「あ? 殺してないよ、なんとなく言いたかっただけって……シアンスロープ犬人族?」

少女の声が聞こえて振り返ると、そこにいたのは先ほどの背格好と服装のシアンスロープの少女だった。

パルウムの筈だったんだがと、少女をじつと見つめると不思議そうに少女は首を傾げた。

「はい。リリはシアンスロープですけど?」

「……てつきりパルウムかと思っただが——おい、膝から血が出てんぞ」

「え? あ、さつき突き飛ばされたときにひゃあ!?!」

「んじゃ、治療にいくべ」

ヒョイツと少女を抱えて連れていく。変な叫び声が聞こえたが気にしない気にしない。

というより、この子軽すぎじえね? 飯食ってんの?? 服もこんなだし……まさか、奴隷として誘拐された娘なのかも……

「放してください!! いくら助けてくれた恩人とはいえ、叫びますよ!!」

「…グス。大変な思いしてきたんだな」

「何、急に泣いてるんですか!?!」

「誘拐なんざ許さぁーんツ!!」

「誘拐!?! リリは誘拐されたんじゃないです!! というより、現状誘拐されています!!」

「お兄さんがついてやるからなあ!!」

「何なんですか、この人ーんツ!!」

この日の夕方。シアンスロープの少女を担いだ男が堂々と誘拐していたと少し話題になっていたという。

冒険者でも一軒家は夢ではない

「だからリリは誘拐なんてされてません!!」

「ううう……現実逃避するまでに心が追い詰められていたんだね。でも、大丈夫だよ。おじちゃんを守ってあげるからね」

「どこがおじちゃんですか！ それに人の話はしっかりと聞いてくださいー」

全く現実を受け止めない少女にまた涙を流しながら俺は家の扉を開ける。家はリビングとキッチンのほかにも個室が3部屋ある。

ヘステイアちゃんたちをこの部屋に呼ばないのは冒険者と個人を一緒にしたくないからである。それぞれが充実しているからこそ、楽しく出来るのである。というより、教えたら居座られて色々迷惑だからだ。

ということで、少女をリビングにあるソファに降ろして、自分は消毒用のポーション等を取ってくることに。

「……ここに住んでいるんですか？」

「ん？ まあ、一人の時もあるし、時々泊まる奴もいるからなー……で、お嬢ちゃんの名前なんだっけ？」

「さつきからリリって言ってるじゃないですか!! 聞いてなかったんですか!?!」

「そっかりりっちかあ……」

「変な呼び方しないでくださいって……もお良いです」

反論する気も失せたりリリはため息をついて辺りを見回した。ソファの他に机や椅子、鮮やかな装飾を施された絨毯。ただの冒険者がここまで裕福な生活を送れるものだろうか？

名のある冒険者、または他国の有力者の可能性もあるとリリは考える。

「あの……お名前はなんていうんですか？」

「ん？ そういえば、名乗ってなかったか。俺はミツキだよ……しが  
ない冒険者さ」

「ミツキさん……」

リリの中で名前を復唱する。都市の大派閥である、フレイヤ・ロキ・  
ガネーシャファミリアでもその名を聞いたことが無い。

彼に対する疑問が増えていく中で、ようやくミツキがリビングに姿  
を見せる。それに気づいたリリが彼に視線を合わせた瞬間、目を見開  
いた。

「いやあーまいったまいった。俺の家に消毒液とかないからさ……こ  
れで治療するわ」

「な、な、な……」

言葉が出てこず彼が持ってきたポーシヨンに指をさしながら震わ  
すりり。

そんな彼女を不思議そうに見ていたが特に気にすることなく、ミツ  
キは持ってきたポーシヨンらしきものが入っている瓶を開けて彼女  
の膝の傷口にかけた。

それもお、勢いよくドバドバあゝつと。

「……つよし。これで終わりだな」

「ちよっ!! ちよつと待つてください!!」

「どった？」

「な、なんて高価なもの使ってるんですか!？」

「高価？ いや、傷口から菌が入って病気になっただら困るし……」エ  
リクサー”なら傷口の菌とか殺せて傷も綺麗に治るいいことしか  
ない」

「こんな傷口なんて舐めてたらなります!! これ一本でいくらすると  
思ってるんですか!？」

「5万ヴアリスした。俺が買ったんだから覚えてら」

「冒険者ならこのアイテムの価値ぐらいわかりますよね!? バカなんですか、あなたは!!」

リリから出たとは思えないほどの大声が部屋中に響き渡る。彼女の叫び声がミツキの頭の中で反響し、現状頭を押さえて蹲っていた。そんな彼を見てリリはぜえぜえと肩で息をしていたが、呼吸を整えるため大きく息を吸い込んでいた。

「……つたく、アイテムの価値ぐらいわかってるっての」「ならッ——」

「それを分かったうえで、リリっちの傷を治したかったんだよ。だから気にすんな」

「う……」

悪戯が成功したときに見せる子供の様な笑顔にリリは少したじろいでしまった。彼に聞こえない声で“なんなんですか……”と軽く睨んでいると……目の前に一枚の紙。

静かに受け取りかかれてる内容を見る。

——請求書 治療費1, 000, 000ヴアリス——

「……………」

「あ、今月中に払ってね♪」

「お、お金とるんですか!? というより、なんでこんな高いんですか!」

「そりゃ、“高価なアイテム”使って治療したからね。大変な治療だったよ、成功したのが不思議なくらいだ」

「エリクサーぶっかけてただけですよね!? それにエリクサーって5万

ヴアリスでしたよね！ 擦り傷なんかで死ぬわけないでしょう！！  
それに貴方が勝手に連れて来て治療したんでしよう！！」

「こらー！ 女の子がそんな喋り方しちゃいけません！！ そんなふう  
に育てたつもりはありませんのよ！！」

「誰なんですか！！ 貴方は誰のつもりで言ってるんですか！！」

「ミラージュ・ツベルクス・キュリー夫人」

「だから誰なんですか！！ それでミツキなんですか！？ って、夫人  
じゃないですよね!?!」

尻尾さえも逆立って叫び続けるリリを見て楽しそうに笑うミツキ。  
そんな彼の姿に手を震わせながら怒りを抑えるリリだったが、彼の足  
を思い切り踏みつけた。

急な痛みにもツキは顔をしかめて踏まれた足を抑え込んで唸りだ  
すのを見て少しスッキリしたりりであった。

良いだろう……結ぶぞ！ その契約！！

リリっちの治療も終わり今はリビングで俺はコーヒー、彼女には紅茶を淹れてあげる。ソファに座りながら先ほどとは打って変わって借りてきた猫のように静かになってしまった。

そんな彼女を椅子に座りながら静かに眺める。癖のある髪から見える可愛い耳はヘタつと下がっており、彼女の瞳は俺の視線から逃げるように逸らす。

彼女のスタイルが綺麗に映し出す服は小柄にも関わらず、女性らしい膨らみが……

「どこを見てるんですか!!」

「あが!」

紅茶の入っていたカップが飛んできて顔に直撃した。衝撃で顔がのけ反るが、カップが床に落ちる前に左足の親指とひとさ……

「ほおおおおお!! つつたあああああー……っ!!?!」

「何なんですか、この人は……」

ふくらはぎに電気が走ったかと思うと筋肉ちゃんが痙攣しだして脳に激痛を届けてくる。椅子から転げ落ち、吊った左足を上げながら泣き叫ぶミツキ。しかし、その足先にはしっかりとカップは掴んだままである。

そんなミツキの姿を見て、何度目か分からないため息がリリの口から洩れていた。

少し涙目になりながらも痛んだふくらはぎを撫でるミツキは呆れて自分を見るリリを見つめる。何だと思って彼を見ていると……

「べ、別に痛くないんだからね!!」

「そんな涙目になりながら言うことですか?」

流石になれてきたのか叫ばずに淡々と返すリリを見て少しつまらなそうにふざけるのを辞めたミツキ。足で挟んでいたカップを机に置き、再度椅子に座り髪の毛を雑にかきリリに話しかけた。

「で、なんで俺の家に居てんだ？」

「あ・な・た、が連れてきたんですよ!! もう忘れたんですか!？」  
「♪」

「もお、良いです。リリは帰ります。治療は、その…ありがとうござい  
ました」

「さっきの冒険者になんで襲われてた？」

もうここに居る必要はないとリリは立ち上がりミツキに頭を下げ  
て出て行こうとする。リビングを出て廊下の先にある玄関を視認し  
た瞬間、リリの足が止まった。

彼に振り返ることなく、その場で止まる。ミツキはそんな彼女をた  
だ静かに見つめていると、フワツと彼女の髪が動いた。

「リリは……サポーターです」

「サポーター？」

「はい。ソーマ・ファミリア所属のサポーターなんです。リリは戦闘  
向きではありませんし冒険者様について行って荷物を持つぐらいし  
かできません。先ほどの冒険者様の方とは短期契約でダンジョンに  
潜っていたんですが……」

「……金銭トラブルか？」

リリが俯き喋らなくなっってしまったので、ミツキは問いかける。そ  
れが当たっていたらしく彼女は静かに頷いた。

サポーターを軽視している冒険者は多くいる。戦うのは自分、何も  
出来ないサポーターは荷物の番しかできない。



そういった考えを持つ冒険者はサポーターとのトラブルは多数起きている。

彼女も契約した内容と違う金額に不満を持ったか、あるいは不当な対応で逃げていたかと考えられた。

ただ、このまま彼女を返したところでまた狙われる可能性もある。どうしたものかと考えながらも彼の身体はすでに動いていた。

彼女の横を通り抜け、三つの個室のうちの一つの扉を開ける。そして、開けた部屋を見つめながら一人思索中。

そして、髪の毛をガシガシとかきながらリビングに戻り椅子に座る。

「なあ、リリっち。このまま外に出てもさっきの奴に襲われるんじゃないか？」

「いえ。その辺は大丈夫です」

「あらま、さっぱり!？」

少しは動揺した姿を見せるのかと思ったら大丈夫と言い切った彼女に驚いてしまった。さっきまでの思索を返して!! ねえ返して!!

「今までそういったことは多くありましたし、所詮……冒険者なんて」

「ん?」

「なんでもありません! ミツキ様に迷惑をかける訳にもいきません!」

「……そうか。まあ、無理に止めはしないが——」

「それより……リリからミツキ様にご提案があるのですが「よし、その提案承知した!」まだ何も喋ってませんよ!」

「一緒にダンジョンに潜りませんか、だろ? 別に良いよ。あ、金額は半々でいいか?」

「半々は貰い過ぎです! リリが三割でいいですから!」

「んじや、その提案呑まない。帰れ!!」

「なんでミツキ様が損するのに怒るんですか!？」

「一緒に危険を共にするんだ。なら手に入れた報酬に関しても綺麗に分け合うのが当たり前だろうが。これ、俺の常識。それを吞まないと契約しないからよろしく」

「……わ、分かりました」

「よし。そしたら、明日の十時に俺んちに来てくれ。ダンジョンの前とかだと、さっきの奴に合うかもしれないから」

んじゃ、よろしく。とりに手を差し伸べるミツキ。彼女は伸ばされた手に驚いた表情を見せる。しかし、すぐに表情を戻し、頭を下げた。

「はい！ よろしくお願いします、ミツキ様♪」

「……ああ、それじゃ気を付けて帰れよ」

「はいー!」

伸ばしていた手を引つ込め、バイバイと手を振るミツキにリリは笑顔で返して足早に部屋を出ていく。

彼女が出ていくのを見届けたミツキは椅子に座り込み、飲みかけのコーヒーが入っているカップを手に取り口に含んだ。

「はあ…はあ…っ」

逃げるようにミツキの家を出たりりは走る足を止めることはなかった。人ごみをかき分け、息が切れようとも。

冒険者のことを聞かれ、ごまかそうと声を出した瞬間。自分を見つめる彼の瞳に言葉が出てこなくなってしまった。連れてこられて治療をしているときとは違い、明らかにリリ自身を見ようとしていたか

らだ。

だから、全て嘘ではなく所々に本当のことを交えながら話した。けど、最終的には言葉が続かず黙ってしまった。彼の瞳を見ていたら嘘が付けなくなっていたからだ。頷くしかなかった。

これ以上自分を見られたらマズイ。だから、喋り方を変えた。普段、冒険者に言い寄るときの“仮面”を付けた口調に。けど、それは彼にすぐばれてしまった。少し表情が悲しそうにしていたのがリリにもわかった。

そういえば、ずっと彼のペースに吞まれていた。逃げることも出来ず、常に彼の手の中……

伸ばされた手も取ることが出来ずに逃げ出した。冒険者の癖に……リリの心を惑わす。冒険者に弱みを見せてはいけない。冒険者なんか……

嫌いです

そう。社会的に

リリっちとの契約も終えて一人家でゴーロゴロ。あ、それゴーロゴロ……

「はあ……飯でも食いに行くか」

とてつもなく虚しくなりました。

服に付いたホコリを掃い。家を出て目指すは素敵なエルフさんがいる酒場に向かうことにした。オラリオも夜が近づくとつれ、ダンジョンから帰ってきた冒険者の数が多くなる。

通りにある酒場からは今日の成果は良かったのだの、明日はもっと頑張ろうだの聞こえてくる。路地裏に耳を傾ければ、酒に酔った冒険者達が喧嘩していたりと相変わらず賑やかなことだ。

けど、そんな喧騒も悪くない。だっていつも喧嘩している声が聞こえたかと思うと、懐にいつの間にか金貨が入り込んでいるのだから。なぜか利き手が少しジンジンするのはなんでだろう？ オラリオ七不思議のひとつである。

懐が温かくなったことを不思議に思いつつ行きつけの店“豊穰の女主人”に着いた。

ドワーフの女性が主人をしているこの店は、働く人すべてが女性である。それが原因で男性客が後を絶たないのだが、この店の店員は一癖も二癖もある者ばかりだ。店員に手を出そうもんなら殴り飛ばされ、喧嘩が始まるもんなら店からたたき出される。

へたな冒険者よりも強い店員ってどんな店だよと最初の頃は思ったが、静かに過ごせばとても居心地のいい店である。

中から聞こえる暖かい空気と笑い声に誘われつつ店の戸を開け――

「そうだ、アイズ！ お前、あの時の話聞かせてやれよ！」

店に入った途端、聞きたくない声が聞こえてきた。てか、今日だけであいつに何回会うんだよ……

関わりと面倒なことになることこの上ない。触らぬバカに争いなしだ。

静かにかつ離れて歩き、カウンターに座り込む。すると、カウンター越しからお目当てのエルフ様が…

「よく飽きずに来ますね」

「相変わらず冷たい態度すぎない、流石にちよつと泣くよ俺？」

「貴方を甘やかすところがなくなることにならないですから」

「…フンだ。いつもの頼む」

「分かりました。あと、拗ねないでください」

目の前の綺麗なエルフ。リユー・リオンは俺がこの店に来た時に惚れ込んだ女性である。

目が合った瞬間、彼女に近づき“俺とけつきよんしてくりやはい!!”と言ったのは今でも覚えている。良い思い出だ。緊張しすぎて口が回らなかつたわけではない。見惚れてただけだ。

「あれだって！ 帰るとき、何匹か逃したミノタウロス！」

「はあ……うるさいねえワンコは」

折角、いい気分だったのにワンコの声で気分を害された。てか、話を聞いていたらあの時のミノタウロスってこいつらのせいだよ。

チラツと席を見てみると、ロキファミリア幹部が勢ぞろい。てか主神のロキまで居るよ。

ワンコが一人で盛り上がり、アマゾネス姉妹とロキはその話に入る。フィンくん、リーさん、ガレスのじっちゃんもは会話に入る気もないように静かに酒を飲んでいた。

ワンコは楽しそうに話しているが、自分たちの犯した不手際を楽しそうに笑っているあいつが馬鹿らしく思える。

「それでアイズが助けたいかにも駆け出しっていうようなひよろくせえ冒険者<sup>ガキ</sup>が！ 抱腹もんだったぜ。ウサギみたいに壁際に追い込まれちまってよお！ 可哀そうなくらい震え上がっちゃまってやんの！」

光景を思い出してワンコは笑いを堪えながら話を進めていく。ミノタウロスの返り血を浴びて真っ赤になっていたトマト野郎……

泣き叫びながら逃げていくトマト野郎……

こいつがさつきから笑いの種にしているのは――

「ベルさん!？」

「……ベルちゃん?」

女性の声が聞こえたかと思うと一人の少年が酒場を走って出ていくのが見えた。彼の行動で店内は一瞬静まり返ったが、またすぐに賑やかな喧騒に戻った。

けど、俺は去って行った少年……ベルちゃんの表情が脳裏に焼き付いた。口惜しさと情けなさで涙を堪える彼の姿が……

「ミア母さんの店で食い逃げとは、命知らずですね」

「リユーさん。これ、さつきの冒険者の勘定」

「なぜ、あなたが？ それにこれ……どう見ても」

リユーさんに有り金全部渡して立ち上がる。彼女の言葉などすでに耳に入っていない。俺の視線はすでに目の前のあほ面しか捉えてなかった。

フィンが俺に気づいて止めに入る。しかし、俺はそれを払いのけ

ベートに近づく。未だに意気揚々と話し続けるベートだが俺に気づいた瞬間、威嚇するように荒々しく席たち詰め寄ってきた。

「てめえ!! 今日によくもやっ——ガア!?!」

「きやあ!?!」

ベートの顔を掴み後頭部から机に叩き付けた。衝撃で机は砕け料理や酒は辺りに飛散する。一緒の席に座っていたエルフの少女は驚いて声を上げていたが。アマゾネス姉妹、アイズは驚いてそれを見つめていた。

ガレス、リヴェリアは“馬鹿者が…”とため息を漏らしていた。

「ちよ、ちよつとあんた何してんのよ!?!」

「いやあー、このワンコが俺の仲間を笑いものにしてたんでな? 流石に頭に来ちやったのよ。けど、まだまだ足りないよね? ク・ソ・イ・ヌ!」  
「ゴオハ!?!」

ベートを掴んだまま勢いよく店の扉に向かって投げ飛ばす。扉にぶつかって肺から空気が一気に抜けたのか苦しそうに声を上げていた。

投げられたベートは扉を抜けて店の外に消えていった。しかし、扉は無傷で壊れていないのが不思議な所。店を出る前に主人の方を向くと、えらい怒ってらっしゃること。

「店の修繕費は明日もってくるよ」

「当たり前だ!! これ以上店で暴れるんじゃないよ!」

「はいはい」

適当に返事をして店を出る。

今までの騒動のせいで、店の中は静まり返っていたがまたも女主人

が一喝。〃頼まないんなら出ていきな!!〃

その一声でロキファミア以外の冒険者は慌ててメニューを見直していたのは言うまでもない。

宴会の席の机を破壊され、今だ静まり返っているのはロキ・ファミアだけだ。数人の冒険者はベートのせいで面倒な所に喧嘩を売ってしまったと頭を抱えていたが、状況がまだ掴めていないのは主神様。

「な、なんやねん急にあいつ!」

「彼はミツキ。確かLv. 4の冒険者だよ」

「ミツキ? ああ、ベートがよく話してた冒険者かいな……って、Lv. 4!? どう見ても」

「ああ、ベート同様にLv5でもおかしくない強さだよ。けど、そろそろ行かないとベートが死んでしまうかもね」

「そ、そんな死んじゃうだなんて……」

フィンの言葉に金髪のエルフの少女は声を出すが、周りの仲間たちは黙りこ込んでしまう。少女は慌ててアイズの方を見ると、フィツと顔をそむけた。

「ミツキを怒らせると、不味い」

「ああ、何をしでかすか分かったもんじやない」

「あーああ、私しいーらない」

「ま、これで少しは静かになるでしょ?」

「あやつにも少しはいい薬になるだろう」

「同感じゃな」

「え? え?」

フィンの言葉からベートに死の危険が迫っていると思っていた少女だったが、何やら自分の考えと周囲の考えているところは違っているようで、またも頭に?が飛ぶ。



それはロキも同様で要領を得られなかったようだ。説明を求めようと口を開いた瞬間、外からベートの叫び声が聞こえてきた。

エルフの少女が彼の声を聴き、心配して店の外に出る。

「きやあああああああッ!?!」

「な、なんや!?! どないしたレフィーヤ!!」

エルフの少女——レフィーヤの叫び声を聞きつけロキが外に出ていく。そのあとを他の団員が付いていき、店を出る。外ではレフィーヤはしゃがみ込み、外に広がる現状を見ない様に両手で顔を覆う。

ロキに至っては細い目が見開いて信じられないと固まる。

彼等の目に広がるのは……

パンツ一丁で逆さづりにされているベートの姿であった。

その姿はあまりにも滑稽。両手も縛られ、足は何処から持ってきたのか分からない柱に括りつけられており。

彼の腹には“僕は悪いワンコ。ワンワンクウーン”と書かれている。顔には赤い頬紅を丸く描かれ口紅までしている。おでこにはワンコ。

あまりに滑稽。

これがロキ・ファミリアの第一線で戦う凶<sup>ヴァナルガンド</sup>狼なのか。目の前の残酷さに笑うことさえできず、目を背けてしまう。

「て、てめえら見てんじゃねえ!!」

周りからクスクスと笑い声が聞こえており、ベートの怒号も今では効果なし。確かに彼は死んだ。

社会的に。

青春は青い春と書きます。

ベートを外に投げ飛ばし、道で倒れ込むワンコの下に向かう。せき込み立ち上がろうとする瞬間、また頭を掴み地面へキッス♪

「あーなあーたのおキスをく数えましょ♪ ひとつうーひいとおつうをく♪」

「ぶべ!?! ごは!?! おごお!?!」

さあリズムに合わせてワンコと地面にキスをさせていく。これぞリズム天国だ。

一曲歌い終わるころにはさすがのワンコも静かになっていたので、服をはぎ取り近くの冒険者へプレゼント。

パンツ一丁になったワンコ。懐に合った筆を取り出し、一筆したためる。思いの丈をぶつけた俺はかなり満足していた。

でもワンコの顔は赤く染まっていたので、近くの桶に入ってた水で顔を洗ってあげる。

というか、狼人間よりワンコの方が言いやすいな……あだ名変えてあげよう。

「あら?・ 不愛想なお顔。これは可愛くお化粧してあげなくちゃ♪」

そうと決まれば袖をゴソゴソと探り、紅を一つ取り出しては両頬に可愛い丸を書いてあげる。そして、口紅も必要よね。

でもこれだけじゃ誰か分からないから、おでこにワンコって書いてあげるわね♪

「さあ、次は目立つように柱に吊るしてあげて……よいしょっとお!!」

適当な柱を地面に突き刺し、ワンコの足に縄を括り付ける。暴れな  
い様に手は縛るのも重要。

足の方から縄を伸ばして柱に括り付け宙吊りにして、ワンコの一本釣りが完成。周りに散らかっている筆や墨、紅を袖に仕舞いながら芸術作品に見惚れる。

我ながら良い作品を世に生みだしてしまった。

「自分の才能が恐ろしい……」

あ、ベルちゃん探そうつと」

ワンコにあき……じゃなくて、出て行ってしまったベルちゃんを探すため豊穰の女主人を後にした。

その後、ワンコが数週間塞ぎ込んでいたらしいが……俺の芸術作品が気に入らなかったのかな？

ベルちゃんを追いかけて行ったのは良いが、拠点には帰っていないかった。というより、ヘステイアちゃんまで居ないんだけどどこ行ってんだよ、みんな。

廃協会にある朽ちた長椅子に座りながらベルちゃんの行きそうなところを考える。

ギルド？ いや、今は閉まってる

豊穰の女主人？ 戻る勇氣なんてないだろう

俺の家？ 勝手に入ってたらしく

悔しさ、やりきれない思いをぶつけるのに彼が行きそうなところ

……

「……ダンジョン？ マジで？ 夜に？ ないわあー」

でも、ありえそうなことだ。彼の心の丈をぶつけるにはそこしかないだろう。でも、一人でやみくもに向かわれても嬉しくない。なにその青春？ 甘酸っぱくないんだけど？

もつと夕方の土手で夕日に向かってバカヤローとか叫んでよ。夕方じゃなくて夜だけど、土手なんてないけど。

もうちよつと、見ててほっこりしそうなことしといてよ。危なっかすぎるよ。

「……愚痴つてても仕方ないよね。今行くよおーベルちーん」

重い体を引きずりながら、ベルちゃんが青春をぶつけてるであろうダンジョンに向かった。

ダンジョンに向かう途中、道すがら冒険者に聞いてみたら白髪の男の子がダンジョンに向かつていったと情報を手に入れてしまった。

本当に行ったんかいと、内心ツツコミを入れながら内部に入り辺りを探索。

現れるモンスターを退治しながら辺りを見ると、切り刻まれたモンスター死体が落ちていた。魔石も回収されておらず、ただ切り捨てられていた。

完全にあの子だ。モンスターを求めてただただ斬り付けている。え？ 青春じゃなくて、ただの切り裂き魔じゃないのこれ？ ベルちゃん・ザ・リッパーの登場じゃない？

どうしようワトソン君。一人で止められるのこれ？

そのあとも、狂気のベルちゃんの痕跡を追い続け今じゃ6階層。少し俺はオコです。

出てくるモンスターなんぞ適当に払っているだけ、黙々と歩いてると金属音が微かに聞こえてくる。これは誰かがモンスターと交戦している証拠だ。

というか、もうベルちゃんしかいないよね？ 俺は音のする方へ近づいていき、一発目何を言ってやろうかと考えていると見えてきた光景に唾然とした。

ベルちゃんいた。確かにいた。

けどね？ 数十体のモンスターに囲まれて一人で戦ってるなんて

誰が予想するよ？

しかもあのモンスターって全部ウォーシャドーじゃん。人型で陰に潜むモンスター、攻撃方法は手の爪だが伸縮自在であり6階層では強い方だ。

そんなモンスター数十体と戦えているベルちんを見て、成長したなあ……なんて感じていたがよくよく見ると、体中斬られた跡があり、息も上がってた。

完全に無茶してる。あのバカ、無茶してる。俺は盛大にため息をつくと、袖白雪を抜き取り刃に魔法を込める。

「次の舞・白漣ッ！」

刀を振る直線状に冷気の刃が飛んでいく。冷気の刃に触れたウォーシャドウは接触面から徐々に凍り付いて動かなくなった。

ベルちんの周りにいるモンスターをこれで氷漬けにして一掃していく。

「はあはあ……ミツキ？」

自身の目の前に白い刃と肌寒い冷気が通り過ぎたかと思うと、目の前のモンスターが奇声を上げながら凍り付いていた。

こんな技を使うのは一人しかない。次々に飛んでくる冷気の刃を辿れば、そこにはミツキの姿が…

「うわああ!! あぶな!!」

「ちいっ!! 当たらんのだが……」

冷気の刃が自分の身体を貫こうと迫っていた。慌てて避けると、何とも残念そうにこちらをみるミツキの姿。

って、なんで僕が狙われなくちゃいけないんだよ!?

「何するのミツキ!!」

「うるさいは青春野郎!! いや、ベルち・ザ・リツパー!!」

「なにそのあだ名!? すぐください!」

「んなことどうでも良いわい! あほベルちん! 夜に一人でダンジョン潜るなんてお前みたいな初心者がやることじゃないんだよ、あほちんが!!」

「あだ!?!」

ガツン!!と、殴りつけると痛そうに頭を押さえてはいたが先ほどまでも勢いはなくなり、静かに黙りこくってしまった。

まるで、生徒に説教しているみたいになってため息が漏れてしまう。ガシガシと頭をかいて。未だに白髪をこちらに見せるベルの頭を撫でる。

「これ以上問い詰めるつもりはない。何を考えてこんなところまで来たのか、俺はお前じゃないから知らん。ただなベル。仲間を不安にさせるような行動をとる奴は一人前の冒険者じゃないぞ?」

「…………ごめん」

「よっしや、なら帰るぞ? 俺は眠たくてたまらん」

「ねえ、ミツキ」

刀を仕舞い軽く体を伸ばし眠気を抑える。トボトボと歩く俺の後ろからベルちゃんは声を掛けてきた。

振り返ると、とても純真でそれでいて真剣な彼の綺麗な眼差しがそこにはあった。

「どった、ベルちん?」

「僕、強くなりたい…………」

「…………そっか」

俺は笑顔を返してやった。純粹に強さを求める若き冒険者がそこ

く眩しく見えて、なんだか心が騒いでいた。

「あつと、ベルちゃんベルちゃん。これ飲んどけ」

「わつと！ これは？」

「グミタイプのポーシヨンだよ。噛んで飲めばハイポーシヨンと同じ効果を持ち、リンゴ風味のその味は癖になる。ひとよんでアップルグミだ」

「そ、そんなのあるの!？」

「ああ、試作品なんだが貰いもんでな？ 疲れてるベルちゃんには必要だろ」

「ありがとう、ミツキ。それじゃ……」

渡された赤色のグミを口に入れ噛んで呑み込むベルちゃん。ゴクつとグミがベルちゃんの喉を通る。

「どうだ、ベルちゃん？」

「えーと、なんだか効いて……る、よお——な？」

喋るベルちゃんに強烈な睡魔が遅い、意識が切れたようにその場で崩れ落ちた。

ミツキがベルちゃんの口元に手を近づけると、規則正しい寝息が漏れている。それを確認して、ミツキは眠る彼の左足を持ち、ズルズルと引きずる。

「つたく。簡単に人を信じるのは悪い癖だよ、ベルちゃん？ 本当に危なっかしい子だねえ」

「Z z z …… Z z z …… ゴオ!？」

「あ、段差があつたか。ごめんね、ベルちゃん。でもこれも勉強だよ、冒険者としてね？」

実は勝手な行動をとつたベルに対して、まだ怒っていたミツキで



あった。

そのままズルズルと引きずり、ダンジョンを出て街を通り廃協会に入り奥の扉を抜ける。そこにはヘスティアちゃんが返ってきていた。

ベルちゃんが居なかったことに心配してたのか、扉が開いた瞬間に飛び切りの笑顔が見えたがベルちゃんがズタボロになって引きずられてるのを見て顔面蒼白。面白いロリ巨乳さまだ。

俺に怒鳴りつけてくるヘスティアちゃんに事象を説明すると、落ちていてくれてベルちゃんの行動に呆れてる表情を見せていた。

「全く。ベル君は危なっかしいね」

「ま、出来るだけ俺が見といてやるよ」

「ありがとうね、ミツキ。けど、睡眠薬で眠らせる必要あったのかい？」

「うん？ 俺の気晴らしのため」

「……はあ、相変わらずだよミツキは」

「けど、ヘスティアちゃんにも朗報だと思っただけだね？」

「ん？ どういうことだい？」

「ベルちゃんをよく見てごらん？ ズタボロの上に砂まみれだ。こんな状態で眠らせるには彼も可哀想だろう？」

「どの口が言うのさ。けど、そうだね」

「俺はもう帰らなくちゃいけないから、ベルちゃんをお風呂に入れてあげなよ」

「へえ!? ぼ、ボボのぼの僕がベルきゅんを!？」

俺の一言で想像したのだろう。無抵抗で意識のないベルちゃんを生まれたままの素肌にしてヘスティアちゃん自らが彼の身体を洗う光景を。

一瞬にして顔を真っ赤にして頭から煙が出てる。しかし、そんな彼女にも少しの理性があったのか思いとどまって少し冷静になりだした。

「い、いやいやいや。流石にそれはまずいよ……」

「あ、ちなみに薬は明日の昼頃まで切れないよ？　これは実証済み」  
「へ？」

「ベルちゃんには俺が体を洗ってやったとか言つとけばいいんだよ？」  
「ちよー！」

「なに。いつもヘスティアちゃんを心配させて困らせてるんだ。これぐらいのことしても許されるさ」

「……………ミツキ、君って奴は——」

本当にいい子だよ!!」

最高に良い笑顔で握手を交わす二人であった。

ミツキはそそくさと拠点を出て自分の家に帰る。ベルちゃんの初め  
てが散らないことを祈りながら。

次の日。ヘスティアファミアミア拠点内——

「神様？　どうして、こつちを見てくれないんですか？」

「へえ!!　み、見てないぞ!!　僕はベル君のなんて見てないんだから  
な!!」

「はい？」

倒れたって恥ずかしくない　もう一度立ち上がれば

リリとの約束の時間、俺は玄関前で一人静かに待っていた。

一応、ダンジョンに向かうのだから普段の漆黒の和装に愛刀である袖白雪を帯刀し、両手にはヒマワリの花束。彼女が来るのを今か今かと待ち続け……

「何をしているのですか？」

「おお……リリっち。今日も可愛く愛らしい！　俺の気持ちをここに詰め込んだので受け取ってくれないか!!」

とことこと俺の近くに来て、軽く怪しんだ表情でこちらを見ていた。裾がボロボロになっているフード付きのコートを羽織り、自身よりも大きなカバンを背負っている。

そんな彼女に花束を押し付ける。その言葉の通り、彼女の顔にヒマワリの花束をグリグリと……

「——邪魔です!!」

「んがあ!?!　俺の花束があ!!」

それは綺麗にヒマワリの花束をリリっちが叩き落とす。俺の手から落ちたヒマワリは地面に叩き付けられ茎がペキッと折れ、無数の花弁がその場で舞っていた。その光景を見た俺はその場で膝間づき項垂れる。

「何なんですか、あなたはいつもいつも！　渡すにしても人の顔に押し付ける必要ないじゃないですか！　少し鼻がムズムズしてますよ——」

「えぐ、ひっぐ………」

「そこまで泣くことですか!?　ほら、早く行きましようよ」

「ぐじゅ……びえ……」

「早く泣き止みなさい!!」

泣きじゃくる青年を叱りつける少女の姿が朝一のオラリオで見られていた。

朝のバカ騒ぎからやつとの事、ダンジョンに潜り始めたミツキとリ。現在、6階層。

前をミツキが歩き襲ってくるモンスターを倒しては、器用に袖白雪で魔石を弾き出し、それをリリが受け取り鞆に入れていく。

リリも援護用にショットボウガンを装備しているが全く使用していない。する暇がないのだ。

彼の間合いに入るモンスターはたとえ背後だろうと簡単に切り伏せられ、さらにはリリの背後から出てきたモンスターさえ、苦無を投げてすぐさま倒してしまうのだ。

「カラダはあこんなにいたくたくたに疲れてるのにく　ココロはあどうしてえドキドキが止まらないんだろお?」

それにさつきから聞いたことない歌を口ずさみながらモンスターを倒している。ニコニコと楽しそうにしていることから少し狂気じみた気配をリリは少し感じていた。

そんな彼の姿を見ながらリリは色々と考えてしまう。このダンジョンに入る前、自分のLvを確認してきてそこにあつた階層でしか冒険しないといった。

モンスターからでたドロップアイテムを回収している間、彼はリリの周辺を警戒して安全に作業できるようにしてくれていた。まるで、彼がリリのサポーターのように行動するのを見て、彼に聞いた。

———気にせず、冒険して頂ければいいのに。ミツキ様は甘すぎますよ?」

——あ？ だって、仲間を気遣うのは当たり前だろ。それに一緒に冒険してるんだから楽しくした方がいいじゃん。

屈託のない笑顔。今までの冒険者とまるで違う、調子が狂う。やりづらい……

冒険者なんて——

「リリっち。そろそろ昼飯にするべえー」

「え？ お昼？」

ミツキの声でリリの意識が戻る。ふと、声のする方を見ると行き止まりの先に風呂敷を敷いて座り込んでいる彼の姿が見えた。

ダンジョンの中でそれもセーフティエリアではない所で昼飯、相変わらず常識離れた冒険者である。リリは近付いて、また注意しようとした瞬間、微かにハーブの香りが鼻腔を擦った。

嫌な臭いではない、それどころか心が落ち着くような気がする。

ふと、彼の座る横を見ると御香たく小さな器具が置かれていた。リリの視線に気づいたミツキは、それを持ち上げる。

「これか？ 簡易の乾燥させたハーブを焚くためのな。中のハーブは知り合いの薬師が試供品で作ったモンスターが本能的に嫌がる匂いがする奴なんだと」

「そんなアイテム。聞いたことがありません」

「そら、お友達特権をやつだよ。それよりご飯にするよお」

そういつて、両袖に手を入れてゴソゴソ……

袖から出てきたのは二つのお弁当とお茶。何処にしまっていたのかとミツキを見つめるが気にした様子はない。

おいでおいでと、敷いた風呂敷を今も叩くのでとりあえず隣に座る。ほいつと渡されたお弁当を受け取り、中を確認する。

卵焼き、香草入りの豚の腸詰。白身魚の焼き物。そして、白いご飯の上には「リリの顔」が様々な食材で作られていた。

「つて、何処のお母さんですか!!」

「リリちゃん、夫人のお弁当嫌だった?」

「ミラージュ・ツベルクス・キュリー夫人再来です!!」

「あ、大丈夫よ。デザートにフルーツの盛り合わせこっちにあるから♪」

「お弁当のクオリティ超えています!! その袖の中身どうなってますか!? どう見ても許容量超えていますよね!」

「こら! 食事中は静かにしないか!!」

「今度は誰ですか!? 夫人の旦那さんですか!!」

「執事のセバスチャンです。セバスと及びください、お嬢様」

「まさかの執事です!!」

ハアハアと息を荒げるリリを見て、クスクスと楽しそうに笑うミツキ。そんな彼を見て、怒るのがバカらしくなり手渡されたお弁当を食べることにした。

「美味いか?」

「……美味しいです」

「そりゃよかった」

「……ふん!」

「あだ!」

なんか悔しいです。

そして、ダンジョンを出てギルドで換金し今日の成果……3000  
ヴアリス。

「つしや!! じゃんけん三回勝負で勝った方が2000ヴアリス!!」

「急に何言いだすんですか!？」

「はい。最初はグー!!」

「ちよ!?! 急に始めないでください!!」

結果……

「……ぐじゅ……えっぐ」

「泣くくらいならやらなきやいいじゃないですか……」

じゃんけん勝負。0—3でミツキの大負け。

ガネーシヤにオイルぬってポーズ取らせたらボディビルダーみたいになると感じた今日この頃

今日もオラリオはとても平和です。

「俺がガネーシヤだ!!」

「俺はミツキだ!!」

「やめてよ、ミツキ!」

半裸の神と半裸の冒険者が互いの筋肉を見せあいながらポーズをとっていた。

そんな二人を…主にミツキを止めようと必死になるベルちん。なぜこんなことになっていたのかというところ…話は少し遡る――



本日はリリっちとの冒険はお休みでベルちんの訓練を兼ねて二人でダンジョンへ向かうことになっていたのだが、早く集合場所についてしまったようでボオーっと鼻に舞う蝶を眺めて……

「ふうえええつくしよおおおおおいッ!!」

本当に人の鼻に蝶が近づいてきたため、くしゃみが誘発されてしまった。少し出た鼻水を啜っていると、いつの間にか注目を集めていたようだ。やだ恥ずかしい♪



軽く頭を下げてにやはは♪と笑うが、特に気にする様子もないように完全無視された。

全部ベルちんのせいだと思いつながら、まだムズムズする鼻を噉っているとバベルに向かう大きな檻を複数運ぶフアミリが現れたる。

「ああ、そうか…。もうすぐ怪物祭か」

モンスターフィリア

怪物祭。

オラリオにある闘技場にて、モンスターを放ち調教師がそれをテイクム…だったか。倒す???だったか。

正直、その辺は興味ないので知らん。一般の住民がいる所に態々モンスターを放つ奴の気がしれん。

「ああ…やだねやだね」

「何が嫌なの？」

「ん？ おお、ベルちん遅いちん、何してたちん？」

「そうだ！ ミツキ、ありがとう！」

質問したら急にお礼を言われて頭を下げてきた。はて？ 何かしたか俺???

流星について行けず、とりあえず思いついたことを口に出してみた。

「そっか。そんなに美味しかった、赤飯」

「うん!! って、違うよ!」

「うえ!! じゃ、不味かった？」

「あ、いや。凄く美味しかったけど、なんで赤いごはん昨日置いといてくれたの…じゃなくて、酒場のお金!!」

「さかば?」

「あの、豊穰の女主人のお金払ってくれてたってシルさんから聞いて「ん？ シルさんって…あらやだお隣のベルちゃんったら、お姫だ

けでなくシルシルにも手を出してるなんてとんだplayboy」

「手なんかだしてないから！ とにかく、ありがとうミツキ!!」

「お、う、うん……」

相も変わらず純粋な笑顔を向けてくれちゃってまあー。そういうのふざけてる時にやられると対応困るんからやめてよねベルちゃん。締りが悪くなってしまったことに髪をガシガシとかいていると、ベルちゃんが思い出したように口を開いた。

「えっと、あそこの店主さんが…」

「女将がどった?」

——あのバカに迷惑代として今日の夜タダ働きに来るよう伝えといておくれ!!——

「って」

「うっそーーん」

あの時渡したの逸れ込みだったんですけど……。

しかも色も付けてたはずなのに、恐ろしすぎるよ女将さん。

「えっと、迷惑代って?」

「ん? ベルちゃんは気にすんな。それよりダンジョンに行くぞお」

「ちよつと待っ——つあた!?! 急に止まらないでよ」

バベルに向かって歩き出したかと思うとすぐに止まるミツキ。そのあとをついていこうとしていたベルは急に止まったミツキの背中にぶつかってしまう。

ぶつけた鼻をさすりながらミツキの背中で見えない前方を確認する。

そこにはあるファミリアの主神が立っていた。

ガネーシャ・ファミリア。オラリオの中でも上位クラスに入るファミリアであり。その主神は上半身ははだけており、その体軀は太陽に光で浅黒い肌が筋肉の隆起と相まって綺麗に反射している。

イケメンの神らしいのだが、いつも象のお面をつけているため知る人は少ない。

怪物祭に向けて担当であるガネーシャファミリアがダンジョンからモンスターを連れてこようと準備をしていた。

そこへ激励のため来ていたのが、主神であるガネーシャだ。ただ、来たばかりのベルにとって怪物祭もガネーシャファミリアもガネーシャの事も良く知らない。

ガネーシャとミツキの関係も――

ガネーシャとミツキ。

互いに視線を合わせ無言の時間が流れる中、先に動いたのがガネーシャだ。

「俺がガネーシャだ！」

ドン！という効果音が聞こえてきそうなほどに声を張り上げ急にポーズを取り出すガネーシャ。

ベルにとっては意味が分からなかった。

「ふん。リラックスポーズか、最初は様子見ということだな」

「え？ ミツキなに言ってるの？」

「ベルちゃん。少し離れてくれないか、これは避けては通れない戦いなんだ」

「まって、ミツキちゃんと説明して意味がって!？」

「若いの邪魔しちやいかんよ。こっちまで下がりな」

「お爺さん誰ですか!？」

睨み付けるようにガネーシャを見るミツキに説明を求めようとしたベルだが、何処から来たか分からない眼帯出っ歯のおっちゃんにベルは引きずられその場を離れた。

それを確認したミツキは上半身を露わにする。均整の取れた筋肉に健康的な肌。所々、切り傷などの怪我が見られるが逸れさえも彼を彩る装飾に見られた。

「あ奴もええ具合に仕上がってる」

「貴方は誰なんですか!? だれか説明してえ!!」

「俺はミツキだ!」

ベルの叫びをかき消すほどのミツキの声が響き渡りガネーシャとはまた別のポーズを決め詰め寄る。

サイドチエスト

主に胸筋肉をアピールしながらも、体のサイドにある腕や脚の太さ、さらには体の厚みを見せるポーズ。

「ほお仕掛けてきよったか。じゃが、そのポーズはまだお主には早い  
の」

「ちよつとまって?! 何うえの解説? おじさん一人で盛り上がって  
ないで教えてくださいよ!?!」

「俺が、ガネーシャだ!!」

サイドトライセツプス

横から上腕三頭をアピール。それ以外にも体の横から筋肉のディ  
フィニションなどを見せることが出来る。

「ぐう!!」

俺は、ミツキだあ!!!」

「おお！ 耐えよったか!! そして、モストマスキュラーでガネーシャ様の流れを止めよったわ!!」

それからも、アブドミナル・アンド・サイ。フロントラットスプレッド。バック・ラットスプレッドと攻撃しあつては詰め寄る。

この戦い、誰にも止められな——

「つて、もういい加減にしてよミツキ!?!」

「あ、おい待たんか!!」

流石に周りに人が多く集まつてきて、謎の集団になり始めている。流石に耐えきれなくなったベルがおっさんの制止も聞かずに今もポーズを決めながらガネーシャとにらみ合うミツキにしがみ付いた。

「俺がガネーシャだあ!!!」

「俺はミツキだあ!!」

「やめてよ、ミツキ!?!」

フロントダブルバイセツプスをお互い決めた直後にベルの叫びが重なる。

そして数秒間、時が止まったかと思いきや二人は固く熱い握手をした。

「俺がガネーシャ」

「俺はミツキだ」

「……へ?」

互いの健闘を称え頷く。

ガネーシャは去つて行つた。“俺がガネーシャだ”と、言い続けながらミツキに手を振りながら。

ミツキは手を振り続けた。「俺はミツキだ」と、言い続けながら去って行くガネーシヤを見続けながら。

「俺はミツキだ——

じゃ、行くか」

「こんな状態で行ける訳ないでしょーが!!」

なに怒ってんの、ベルちん？

いつのまにか辺りは二人だけになっており、急に叫び出すベルちんを不思議そうに見るミツキであった。

1000本ノック。声出していこうぜえ！

ガネーシャとの友情を確認し終え、ベルちんとダンジョンの6階層まで潜りモンスターとの戦闘を繰り返す。モンスターが現れてはベルちに投げ、また現れてはベルちに投げ……

「ほらほらベルちん、モンスター1000体ノック始まったばかりだぞお〜」

「こんな鍛錬頼んでげほお!」

あ、さつき投げたウォーシャドウがベルちんのお腹に当たり苦しそうに蹲った。でも、ここで甘やかしてはベルちんのためにならない。

モンスターの戦闘を経て、彼は強くなるのだから。その為にモンスターたちも協力してくれてるんだもんね。今、振り回しているカエル型のモンスターも涙流してるのは心を鬼にしてるんだよね！

「げほ！…ごほっ!! だ、だからこんな鍛錬を「うらあ!!」へ?」

ぱくっ!

「……お?」

投げつけられたウォーシャドウを咽ながらも倒し、少し足取りがおぼつかないベルちん。こちらを向いたのを確認してから振り回しているフロッグ・シューターを投げつけたのだが、対処しきれなかったみたいで頭から腰辺りまでパクつと食べられてしまった。

食べられながらも残った二本足で立っているから大丈夫なのかと思っていたら、徐々に飲み込まれる個所が侵食していく。

あれ? 膝くらいまで食われてね?

「おおおおお、ちよいままでええええ!」

慌ててカエルからベルちんを助け出しました。



なんとか、ベルちんを助けたのは良かったもののカエルの体液みたいなヌラヌラが体中に纏わりついており正直近寄りたくないです、はい。

「誰のせいでこうなったと思ってるのさ!？」

「対処しきれなかったベルちんのせいだろ。人に擦り付けるのよくない」

「僕はある方法で教えて欲しかったんじゃないよ」

「鍛錬だの、特訓だの、調教だの、練習だの、やることは一緒だ」

「調教は違うよね、絶対!」

「分かったから、ヌラヌラの状態で詰め寄るな。ほれ、タオル」

顔を近づけてきたせいで俺の服にベルちんのヌラヌラがかかっちゃまったじゃねえか。

ゴソゴソと袖を探り大きめのタオルを顔に押し付けてやる。カエルの潰れたような声がベルちんから聞こえたが、文句を言うことなく俺の手から受け取り汚れた箇所を拭いていく。

にしても、モンスター78体しかできなかったとは情けない。まだまだ半熟英雄だな。

「で、おふざけはここまでにするとして……………。戦い方なんて別に我流でも良いんだよ。ベルちんは素早く動いて相手を翻弄し手数で攻める攻撃が向いてると思う。けど、周りの状況が確りと把握できてない。目の前の一体しか見えてないんだよ。だから、ウォーシヤドウを倒すのに精いっぱいカエルに丸のみにされるんだよ。気づくこと



が

出来てたら、倒すか避けるかの行動ができただろ？」

「……ミツキってしつかりと見てたんだね」

「喧嘩を売ってるのはこの口でちゆか？」

「いふあいいいッ!!」

折角、懇切マジメに教えてやったのにバカにしたようなことを返しやがってベルちんめ。ぎゅーッ!!と、頬を引っぱり数秒遊んでやる。少し赤くなり始めたからしようがなく手を離すと腫れあがっていたが自業自得だ、バカ野郎。

「でだ……この後、これで目隠ししながらモンスターと戦ってもらおう」  
「手ぬぐい？ これじゃ何も見えないって!」

「だからだろ？ 眼だけで頼ろうとするな、音や気配で判断しろ。俺がそばで見といてやる、怪我はするが死にはしないさ」

「で、でも……」

「はいはい、ベルちんは黙って後ろ向く!」

文句を言おうとするベルちんを180度回転させて手ぬぐいでベルちんの目を塞ぐ。

簡単に取りれない様に少しつよめにキュッと絞って完成。“できたぞ”と声を掛け肩を叩くと少しよろめいたが態勢を直し、辺りを確認するように両手を前に伸ばしてフラフラと歩いている。

俺は少し離れてそれを見学。

「とりあえず、周囲を確認することだ。モンスターが現れたら最初は教えてやるから、頑張れ」

「う、うん!!」

あらま。素直な子ですこと。

とりあえず、モンスターが出て来るまで酒でも飲みながら気長に待つことにしますかな。

袖から酒の入ったヒョウタンを取り出すと、ふたを開けてベルちんを着にグビグビ飲みだすミツキであった。

そして、数十分後――

「あ……ぐはっ――」

「ングング……そんな簡単に行くわけないよ。気長に頑張れ」

何度も壁にぶつかり、躓いたり。モンスターには襲われ、ズタボロになって倒れたベルちん。

まるでぼろ雑巾みたいになっちゃったと、思いながら酒を飲み続けるミツキであった。

中途半端な知識でネタを作ると、話が見えなくなるのは当たり前だ。

目隠し修行を一旦中止し、1000体ノックの残り922体を何とかクリアしたベルちんを引きずりながらダンジョンを後にする。

なんか俺の通った後がヌラヌラ滑ついて光っているが決して大型ナメクジが通ったわけじゃなく、フロッグ・シューターに何度も飲み込まれたベルちんから発生しているから問題ないよね？

極力ヌラヌラが体に触れない様に片足をもって引きずりながらヘスティア・ファミリアのホームに着いたのだが、中に入ってもヘスティアちゃんの姿はない。普段ならベルちんの姿を見て顔を青くして近寄って来るのに軽く肩透かしを食らったようだ。

このまま放置しておくのもなんか嫌なので、風呂にお湯を溜めてそのまま…

「おいっしょとおおおおおッ!!」

「ごぼぼおお!」

風呂にベルちんを投げ入れて終了。なんかバシヤバシヤ暴れてるから死んでも、気絶もしていないようだから大丈夫だろう。

にしても風呂は良い。最初、ここに来たときはシャワーすらない状態だったから俺の一番最初の仕事は浴室場を作るところから始まった。しかも風呂とトイレは別々だ。

あの時はヘスティアちゃんも泣いて喜んでたな。

「我ながらい仕事をした」

「ごぼっ、げぼっ……ここ、どこ?」

「おお、ベルちんよ。死んでしまうとは情けない」

「ええ!? 僕、死んじやったの!?!」

あらやだ素直。

確かにここは協会だけど、この世界に死んだら協会に転送して復活なんて夢物語はないからな？

死んだら、即終了だ。

「つて、そんなわけないよね!? ここお風呂だよね!」

「ベルちゃんに必要な経験値はあと、65, 859じゃ。ここまでの冒険を記録するか?」

「経験値つてなに! 冒険つて記録するものなの!?!」

「それでは記録するぞ。」

ぎ s x d c f v g b h n j m k , l . : ; ? あ q w e d r f t g

y ふ じ こ l p ; @ : : 「」

それではゆつくり休むがよい」

「え、は? ちよ、ミツキ!?!」

ゆつくりと浴室の扉を閉めて部屋を出ていく。ベルちゃんがなにか言いたそうな表情をしていた気がするけど……

ま、いいでしょ♪



ところ変わって、豊穰の女主人。

この間の騒ぎの件で現在、大量の皿洗い中。しかも頭にたんこぶのおまけ付きでだ。

酷いよね? 騒ぎ起こす前に迷惑料込みの金は渡していたはずなのに、それでも足りないって言うんだから。しかも反論する前に頭どつかれて“皿洗いしな!!” だけだよ?

女将の拳痛いんだよ、ちくしょー。

「いつまで泣いてんのよ？ 私も手伝ってあげるからその鼻水ふいて」

いつまでも半べそかいてる俺を見るに見かねてか、ルノアことルノちーが手伝いに来てくれた。おお、リユースさん以外にも天使はいたのか。

少し垂れてた鼻水をズビビ！つと勢いよく啜っていると、なんとも微妙な顔をしたルノちーが見えたが気にしない。

「ルノちー、優しい天使っち」

「それ、褒めてんの？」

「褒めてるよお」

「にやけながら言うな！」

「あだ!？」

皿洗いながら人の足踏むかねこの人。痛みに耐えながら踏んだ本人を見るも素知らぬ顔。

はあ、やっぱり天使はリユースさんしかいなかったか。そのあとも、皿洗いをしながらルノちーと駄弁っていると、女将によるゲンコツが再度舞い降りて来て、たんこぶの上になんこぶ。

31アイスクリームもびっくりなレギュラーダブルのサイズである。

——31アイスクリームってなんだ？

俺の自称妹が自己中心的でドが付くほどの真面目な訳がない。

豊穰の女主人での下働きを終えた翌日。ベルちんとの鍛錬の約束もしていなければ、リリつちとのダンジョン探索も約束していない。その為、今日は今までの疲れを吹き飛ばそうと布団の中でぬくぬくしていようと思っていたのだが……

「兄上。休みの日こそ充実した時間を過ごすものです」

「やかまし。俺は寝たいんだ。疲れてんだ。だから早く扉から手を離せ、命」

ヤマト・命。

タケミカツチ・ファミリア所属。俺と同じ極東出身。

オラリオに来る前から……というか、子供の頃からの付き合いで命や千草、桜花ともよくつるんでいた。その時から、命だけは俺を兄上と呼び続けて今に至る。

「それと、兄上は元タケミカツチ・ファミリア所属ということが抜けています」

「人のモノログに勝手に入ってこないでほしいなあーって、兄ちゃんは思ったり。てか、なんで命がここに居るの?」

「タケミカツチ様から聞きました」

「あの無駄にイケメン神め……」

タケ神が両手を合わせて頭を下げているのが想像できた。このお礼はまたしてやろうと考えているが、現状目の前の自称妹を何とかしたい。

寝室の開きかけた扉を閉めようとする俺に対して、開いた隙間から入り込もうとする命。一進一退の攻防が続く。

というより……

「それと命さんや。どうやって家の戸を開けたのかな？ 私めは昨日の晩にしつかりと施錠した筈なんですけどね？」

「あの程度の鍵。造作ありません」

「いや、誰も褒めてもないし。なんで勝ち誇ってるの」

なんか自称妹が怖いんですが……ベルちんたつけて!!

そういえば、ベルちんに詳しい住所教えてなかったな……ならリリっちヘルプ!!

「誰かに助けを求めても無駄ですよ？ さあ、早く出かけましょう兄上」

「だから人の心を読まないの！ って、何処に行くんだ？」

「今日は怪物祭です！ 一緒に露店を見て周りましょう!!」

自称妹に家連れ出された俺は服の袖を振っばられながら年に一度のお祭り、怪物祭に向かっている。様々な露店が立ち並ぶ東ストリートでは多くの住民が集まり賑わっている。

中でもガネーシャ・ファミリア主催の怪物祭会場であるアンファイアテートルム円形闘技場では既に催し物が始まっているのか、遠くからでも歓声が聞こえてくるほどだった。

まだ眠い目を擦りながら歩いていると、周りに立ち並ぶ露店を眺めていた自称妹が満面の笑みを見せてきた。

「さあ、デートを楽しみましょうー！」

「おいこらまで。いつの間にデートになってんだ？」

「お、男と女子がふ、二人であ、ああ逢引きしているのです!! これは立派なデートだと思いますー！」

「恥ずかしいなら言うなよ、自称妹よ」

急に視線を泳がして頬を染め口調がたどたどしいなこいつ。少し可愛いじゃねえか、ちくしようめ。

目の前で恥ずかしさからか頭しか見えない自称妹の頭を撫でる。急なことに驚いたような声を出した自称妹はこちらを見つめてくる、だから笑顔で答えてやる。

「帰る」

「なぜです!?! この流れで帰るのはどう考えてもおかしいでしょ!!」

「人が多くなってきた」

「年に一度の祭りですから、当たり前です!」

「足が疲れた」

「なら、おぶります!」

どこまで行きたいんだよ、自称妹よ。

やめろ。本当におぶろうとしなくていい。周りの視線が痛いよ、ベルちゃん。誰のせいだ!! (お前だ。

にしても、ここまで冗談を本気で受け止められると困りものだ。この辺は昔から変わってないな。

「さあ、兄上!」

「おい。あいつ、あんな少女に何させてんだ……」

「ままあー、僕もだつこ!」

「スネちやまはもう大きいんざますから。一人で歩けるざますよね?」

「すまん。俺が悪かった。頼むから辞めてくれ」

こちらに背を向けてしゃがみ込む自称妹に土下座して謝る俺であつた。

流石に痛い、気まずい、ここから逃げたいの三拍子だがとりあえず



自称妹と共に離れたいのだが……

「何をしておられるのです。さあ！」

頼むから理解してくれえ  
!!!!!!

名探偵にかかればこんな推理造作もない！

しゃがみ込んで俺をおぶさろうとしている自称妹を無理やり立ち上がらせ、その場を即離脱。流石の俺でもあの光景には耐えられせん。

なりふり構わず逃げ回っていたら、いつの間にか円形闘技場の入口近くまで逃げていたようだ。久しぶりの全力疾走で疲れが溜まる一方だよ、ちくしようにめ。

「さあ、兄上。私に！」

「いや、もういいから」

また、しゃがんで俺をおぶさろうとしてくる自称妹・命の頭を軽く叩く。

なぜ、俺がツツコミ役に回らなければいけないのだろうか？ 俺はボケ専門なんだよ、ちくしようにめ。

叩かれた頭を軽く撫でながら自称妹は立ち上がる。何かに気づいたように周囲に目を配り始める。

「急にどった、自称妹よ」

「いえ。何やらギルドの人たちが少々慌ててるように思えます」

確かに円形闘技場入り口近くにギルドから派遣されたであろう人間が見受けられる。そもそも怪物祭は神々が発端で開催された催しものではない。ギルドが考えた企画だ。

オラリオにさらなる娯楽と発展を考えて生み出された観客たちの前で行う冒険者の調教。これを聞いたお祭り大好きミツキの筋肉仲間である神ガネーシャが食い付いてきて、彼のファミリア監修で行っているのだ。

毎回、お祭りの時にはギルドの人間がこうして視察に来ているのは当たり前なことであるが、自称妹の言う通り様子が変だ。

視察で来ていたであろうギルドの人間が集まり忙しなく話していたり、さらにはガネーシャ・ファミリアの団員まで集まる始末。

これはもしかしなくても、最悪の事態が起きたんだろうなあ……。

「はあ……」

「どうしたのですか、兄上？」

「命、家に帰って自分の武器とってこい。モンスターが逃げた」

「なッ!? それはど　ムウ！」

「騒ぐな。周りに聞かれたら混乱が起きる。とりあえずさっさと行ってさっさと戻ってこい、ほら駆け足!!」

「は、はい！」

号令と共に自分の家に走り出した自称妹を見届ける。ガネーシャ・ファミリアの団員がまた散っていき、ギルドの職員だけになったところについて……

「誰かと思えばエイナっちじゃん。はろはろー」

「ミツキさん!!」

ギルドのアドバイザーであるエイナっちが少し驚きを見せたが、何処か安堵の表情が垣間見えたことで俺の予想が当たっちゃったかなあと、気が重くなる。

「ミツキさん。協力してほしいことが…」

「逃げたモンスターの数と種類、それと逃げた方角を教えてください」

「な!? 何故それを知ってるんですか！」

「ふふ。この名探偵ミツキにかかれば造作もないよ」

驚愕の表情を見せるギルド職員たち。そんな彼らに腕を組んで鼻高々な俺は少し誇らしげである。

「そんなん推理のうちに入らんわ」  
「あん？」

人が勝ち誇っていたらめっちゃ水を差された。聴き馴染みのない独特な口調の声は後ろから聞こえてくる。

無礼な輩を見てやろうと振り返り、そこにいたのは神ロキとその眷属であるお姫がいた。相変わらずの無乳神はさておき、お姫はいつもとは違う服装で可愛さアツプだ。

どこか楽しそうに笑みを見せるロキはギルドの方ではなくて、俺の方を見つめていた。

「この間はどおーも」

「？ はて、何のことやら?？」

「って、忘れてるんかい！ うちのベートをギタンギタンにのしとくれたやないか」

「……ミツキさん？」

「おいこら。エイナつちに誤解を招くような言い方をするな。あれはワンコが悪い」

ジト目で俺を見てくるエイナつちの視線から逃げつつ。無乳神に言い返す。

あれはベルちんの悪口を酒のつまみにしたワンコへのしつけど。

「あれでベートの奴。まだホームから出てきてないんやけど?」

「んじゃ、調教せいこ……おっと」

「何をしたんですか、ミツキさん!!」

「そんなに怒らないでエイナつち！ あれはもとはと言えば——」

「こちらにも非があるから、気にしないでいい」

「ほら！ お姫からの証言きました!! 今日可愛い服装だから、抱きしめていい?？」

「そ、それは…困る」

「おいこらクソガキ！　うちのアイズたんに寄り付こうとするなんて百年早いんじゃない!!」

すこし頬を染めて困ったようにするお姫ちゃん。ああ、可愛らしい反応してくれるじゃないか……なんて思ってたら、無乳神が間に入ってきて、めっちゃ睨んできてんですけど。

怖くはないが、ただだけお姫のこと好きなんだよ。

てか、お姫助けるふりして抱き付いてしたが、お姫にひっぺはがされてますけどいいんかい？

そんなやり取りを見ていたらエイナつちの横にいたミイシャちゃん（エイナつちの同僚）が大きな声を上げる。

「み、みなさん！　今は緊急事態なんです！」

「そ、そうです！　モンスターが逃げてしまって、ロキ・ファミリアにもお力をお借りできませんか？」

「エイナつち。忘れてただろ？」

「ミツキさん!!」

「はい、ごめんなさい！」

そんなに睨まなくてもいいだろうに、本音を言われたくらいで。

ミイシャちゃんも乾いた笑いが見えてんぞ？

そんな俺たちのやり取りを気にもせず、無乳神はニヤリと笑みを見せた。

「ええよ。ガネーシャんとところに貸しをつくつとこ」

「うん」

「ありがとうございます！」

「んじや、話を戻すが。情報をくれるか？」

やっとこさ脱線した話が戻り（誰のせいじや、誰の

逃げ出したモンスターは東部周域に逃げた模様。数は9体。

ソードスタッグ、トロール、そしてシルバーバック。すべて11階層以降のモンスターばかりだ。

「住民の避難と周囲の安全確保はガネーシャ・ファミリアと協力して当たりますが、人員が足りてません。どうかよろしくお願いします！」

「報酬はギルドからたんまり要求するからよろしく！」

「うう…わかりました」

「よつし交渉成立。んじやな、お姫」

「うん」

今からモンスターを討伐していくというのに何とも軽い別れを行う二人。冒険者にとってモンスター討伐は日常の一部である。

そんな二人のやり取りを見ていたロキは、“ほなうちらも行くで”とアイズと共に歩いていく。

エイナは一人。去って行く冒険者たちの無事を祈りながらある人物を思い浮かべた。

「(ベル君、お願いだから避難していてよ?)」

颯爽と登場、そして退場!!

さて、エイナつちに心配されたベル君は現在、主神ヘステイアと共にダイダロス通りを走っていた。

人気のない道を選んで進むベル君。徐々に喧騒から遠ざかることにヘステイアは不安とこれから起きるであろう少しの期待に胸が高鳴る。二人の繋がれた手はより一層強く結ばれ、次第に鼓動は高まり……

「つて、そんな状況じゃなああああああーっい!!」

「か、神様急に叫んでどうしたんですか!？」

「い、いや…変な解説が聞こえた気がただけひやわあ!？」

オオオオオオオオオオオオオオツ!!

「ぎゃああああ!？」

背後から白い大ざるの猛追から逃げる二人。怪物祭の目玉として用意されたモンスター“シルバーバック”はヘステイアを見つけた途端、目の色を変えて追いかけてくる。両腕には暴れない様に繋がれていたであろう手錠と鎖があった。腕を振り回し、まるで鎖を鞭のようこちらへ攻撃してくる。

11〜12階層で出現するモンスターであり、今のベルでは到底勝てる相手ではない。

なら、とる行動は狙われてるヘステイアを連れて周囲への被害を抑えられる場所を探しながら逃げるしかできなかつた。

そして、たどり着いたのがここ“ダイダロス通り”

度重なる区画整理により迷宮と化したここは、秩序が狂いだした広

域住宅街。ここを知らぬ人間が通れば二度と戻ることは出来ないと言われるほどである。

複雑な迷路で行く先が分からない。下手をしたら袋小路に陥ってしまうかもしれない。

一度はここに入ること躊躇ったベルだったが、背後に迫るシルババツクから逃げるためには選択肢がなかった。

狭い路地に逃げ込みシルババツクを撒こうとするも一向に距離を広げることが出来ない。このモンスター自体が2mを超える巨体で素早いのもあるが、冒険者でもないヘスティアはすでに体力が限界だ。息も絶え絶えだ。

なら、立ち向かうか？

オオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!

「ッ!？」

「ベル、君?」

振り返り襲いかかるモンスターを視認する。

今にも殺さんと咆哮するシルババツクに恐怖し、ヘスティアを握る手に緊張が伝わる。それを感じ取ったヘスティアは自分を引っぱる彼に声を掛けるも何も言わずにまた前を向いてしまった。

「(いくら勇気を振り絞っても僕じゃあ神様は守れないッ!)」

変わろうとしても結局は怖気づいてしまう。

誰も守ることが出来ない……

———また、〃大切な人を失ってしまう〃

「嫌だ……これ以上家族を失うのは———」



「正義のヒーローって柄じゃないんだよなあ、俺っちって♪」

「——え？」

ふと、聞こえた声にベルは周りを見回す。

辺りは区画整理により迷路となった上下にある迷路と小さな家の窓ばかり。けど、ベルの耳にはしっかりと聞こえた。

いつもふざけてばかりで周りを引つ掻き回す彼を。

ヘスティア様が僕に抱き付いて困っているところを楽しそうに見ている彼を。

振り回されることは多いけど、それ以上に僕は彼を……ミツキのことをどこか兄の様に思っていた。

聴きなれた声が近づいてくる。それも物凄いスピードを上げて…

「よおおおおおおお〜、べるちい〜んツ!!」

「え、ちょ?! ミツキ!」

心のどこかで助けを求めていた人物が現れた。確かに現れたのだが、なぜ、ロープのようなものに捕まりながらターザンの様にやってくる必要があるのだろうか？

急に目の前から現れたミツキは洗濯物をつついたのであろうロープを掴み、さながらジャングルの王者の様に奇声を上げて、自分たちの後ろにいるシルバーバック目掛けて向かっていく。

彼の頭に紫色のブラジャーが付いていたのは気にしない。窓から身を乗り出して何か怒鳴っているおばさんが居るが気にしない。

とりあえず、彼は助けに来てくれたのだ。

ヘステイアもミツキの登場に心から喜んでるようで、ターザンス  
タイルの彼を見つめる。振り子による力をそのままにシルバーバツ  
クへ攻撃しようとするミツキ。

誰もがミツキへ視線を向けるなか、ベルは先ほど叫んでたおばさん  
を見ていた。

なぜなら、おばさんがターザンしているミツキのロープを切ってい  
たのだ。

「いつけえー、ミツキッ!!」

「くらえやああッ! おおごぶべら!!」

ヒーローショーを見ているかのようなヘステイアの横で顔を青ざ  
めるベル。

主神の応援のもと少しやる気が上がったミツキ。かつこよくシル  
バーバツクを仕留めて彼女の双丘へゴートウーヘブンしようと心を  
弾ませてる瞬間、ロープが斬られたことによりミツキは地面へ投げ飛  
ばされる。

地面へ衝突した勢いそのままに、まるでボールの様にゴロゴロと転  
がっていくミツキ。向かう先は白き大猿。

大猿は目の前まで転がってくるミツキを見ると、またも咆哮を上げ  
足を振り上げる。

ボールが転がってきたらみんなはどうする？

普通は“蹴り返す”よね？

グオオオオオオオオオツ!!

「げほお!」

さながらイブラヒモヴィツチを凌ぐ脚力を見せ、ミツキを蹴り飛ば  
す。

蹴られたミツキは肺からすべての空気が抜けきり、近くの壁に衝突する。体はめり込み意識はすでない。

主人公なのにこの仕打ち。まじズラタン…じゃなくてツラタン。

「……………」

流石の二人もこれには反応することが出来なかった。

何してんだ、あいつと。壁と一体化したミツキに視線を向けた後、大猿をみる。

息を荒くして、今にも襲えるように臨戦態勢を取ってこちらを見据えるシルバーバック。サル頭にはミツキから勝ち取った紫のブラジャーが乗っていた。

数秒の沈黙を破ったのは大猿だった。

グオオオオオオオオオオオオオオツ!!!

「何しに来たんだよおおおおおおオオツ!!」

「ごもつともです。」